

家庭の臨床教育人間学序説

大西正倫

1. 家庭という〈問題〉

家庭と教育をめぐる諸問題

家庭と教育とのつながりは単純ではない。教育学はこれまで、社会学や心理学、医学などの知見を取り入れながら、「社会化」(socialization) とその一環としての「しつけ」、社会化のエージェントとしての親、父親・母親の役割、親の養育態度と子どもの性格形成、過保護や過干渉、初期発達における母性的養育の大切さ、「愛着」(attachment : J. Bowlby) や「基本的信頼」(basic trust : E. H. Erikson)、それらの欠如としてのホスピタリズム (hospitalism : 最初、乳児院などの hospital (施設) で、子どもの成育の遅れなどが見出されたことから、こう呼ばれた。) やマターナル・デプリヴェーション (maternal deprivation : 母性的養育の剥奪・喪失) 等々について語ってきた。あるいはまた、人間形成の場として家庭・学校 (に代表される教育施設) ・(地域) 社会の三つを考え、家庭における教育を、「第一次集団」(primary group) におけるインフォーマルな教育、多くの部分が無意図的な教育と特徴づけて、これを人間形成の基盤をなすものとし、同時に、それと学校や社会での意図的な教育との役割分担や有機的な連携について論じてきた。

以上のような語り口は今なお一定の有効性を保持している。しかし、今日では、それらが暗黙のうちに前提としていたものの自明性が疑われている。すなわち、形態としては「核家族」(nuclear family : G. P. Murdock)、メンタルな面では、男女間・夫と妻のあいだの性愛に基づく近代的結婚、両親と子どもとの情愛的関係を基盤とするいわゆる“愛の巣”としての家庭像、夫と

妻のあいだの「性別役割分業」などであり、これらはいずれも近年、その普遍性に疑問が投げかけられ、時代性が指摘され、イデオロギー性が暴露されているものである。つまり、これまでの家庭教育論は、その前提が自明性を失うことによって、論自体の足許が掘り崩されつつあるのである。

さらに、今日では、実態として、家庭・家族の崩壊や解体、病理や逆機能を示すかのような現象が噴出している。例えば、DINKs (Double Income No Kids: 二人とも働いて収入を得て、子どもはつぐらない夫婦家族)、「ホテル家族」(小此木啓吾 (1930-) の命名。お互いに無関心で干渉しあわず、家庭を休養の場所、思いのままのサービスを受けることのできるホテルと見なしている家族)、家族ならぬ「個族」、同性どうしの「結婚」、あるいはまた、育児不安や育児ノイローゼにとどまらず、家庭内での幼児虐待とそれが引き起こす「解離性同一性障害」(dissociative identity disorder: 従来、多重人格症 multiple personality disorder と呼ばれてきたもの)、「アダルト・チルドレン」(adult children 略してAC。アルコール依存症などの親による、家族関係のうまくいかない家庭に育った人)とその家族間の「共依存」の関係、摂食障害(過食と拒食)や家族の団欒を忘れた「孤食」(または個食)、家庭内暴力(domestic violence 略してDV。子から親への暴力だけでなく、近年、日本でも、男(夫)から女(妻)への暴力が問題化している。)、引きこもり(閉じこもり)、等々である。

家庭と教育をめぐるのは、次のような問題もある。一方で、少子化がすすむなか、家庭の教育力の低下が指摘されるかたわら、すさまじい勢いで早期教育が家庭に侵入してきつつある。胎児教育までもが産業化され、子どもはこの世に誕生する以前から“教育”の対象となる。他方で、生涯教育・生涯学習が唱えられるかたわら、高齢化社会の急激な到来が〈介護〉という課題をわれわれに突きつけている。もっとも、考えてみれば、子どもの養育と高齢者の介護とは、人間に対するケアとして、本質的に共通するものがあるのではないだろうか。

〈問題〉としての家庭

以上のように、今日、家庭と教育をめぐるのは難問が山積していると言わねばならない。これまでの家庭教育論は、総じて、家庭と教育とのプラスの

つながりや美しい関係、光の面を強調し、問題現象についてはそれを特殊なケース・失敗例と見なして除外し、家族病理学やカウンセリングなど、隣接する他の領域に委ねようとする傾向をもっていたのではないか。これでは、今日の家庭をめぐる諸現象に肉迫し、言説の状況に太刀打ちすることはできない。そもそも“問題を起こす問題の家庭と、問題のない健全な家庭とがある”というような認識の枠組みでは、今日の状況はつかみきれないのである。“家庭によっては問題現象が生じる”というような枠組みを脱し、“現象としては現われなくても、家庭は根本的に同質の問題を抱えている”“家庭・家族そのものが原理的に問題なのだ”という認識に立たなければならない。そこにおいて必ずしも教育が成立しないばかりか、子どもの人格を破壊し、“魂の殺人”(A・ミラーの著書の邦訳書名)さえ犯しかねないもの、それが家庭である。“愛の巣”それ自体が“病巣”であるのかもしれないのである。ちなみに、幼児虐待については、「虐待されて育った子どもが虐待する親になる」というような連鎖が見出されている。ACについても同様である。この連鎖を断ち切るにはどうすればよいのか。その前に、なぜこのような連鎖が生じてしまうのか。“母の愛”や“家族の絆”を公理とせず、美化・神聖化しないで、家族と家庭というものを根本から捉え直すことが求められる。そして、“家庭では何を教えなければならないか”“子どもが学校に上がる前に何をしておくべきか”というような、従来の常識的で常套的な問いの地平、その底を打ち破らなければならない。今日、家庭と教育というテーマは、それをどこから考えていけばよいのかという問いを、われわれに突きつけているのである。

ではまず、人間における家族というものの原初の姿、その中に含まれる根本原理を探るため、動物社会学・霊長類学の教えるものを見てみよう。

2. 原初の家族の姿

ヒト・家族・ケア

家族の成立は人類の発祥と同時だったと見ることができる。

あらゆる生物は、種に固有の社会をつくる。それを種社会(スペシア)という。さらに、動物の種社会を構成する社会的単位をオイキアというが、こ

の文脈にのせて人間の家族というものを捉えることができる。すなわち、ヒトにおけるオイキアが家族である。動物社会学的に言えば、家族という社会集団を形成した高等霊長類をヒトというのである。つまり、人類の誕生と家族の成立とは同時であり、同じくらい根源的な現象なのである。

では、どのようなオイキアを家族というのか。河合雅雄（1924-）は次の五つの条件を挙げている。

- ①オイキアを構成する特定の雄・雌間の持続的な親と関係が社会的に承認されていること。
- ②雄・雌間に経済的分業があること。
- ③インセスト・タブーがあること。
- ④オイキア間に外婚制（エクソガミー）があること。
- ⑤複数のオイキアによってコミュニティが形成されること。

しかし、ヒトの場合、アリやハチとは違って、このオイキアは遺伝子に組み込まれ本能によって規定されたものではない。家族は創られた社会制度である。制度を創出するためには高次の文化的創造力と言葉が必要であり、また、家族が成立するためには〈協同〉〈分配〉〈交換〉などの社会的行動が発達していなければならない。

そして、ここにはじめて、単なる雄ではない社会的存在としての「父親」が登場する。①所属するオイキアを防衛する。②オイキアを維持するための経済活動をする。③子どもの養育にあたる。この三つの社会的役割を果たす雄を「父親」と名づけるのである。

以上の説に立つとき、われわれにとって重要な意味をもつのは、①原初の家族においてすでに雌雄間の経済的分業（性別役割分業）があったということ、②父親というものがヒト社会においてしか存在しないこと、父親の登場が家族の成立と同時であるということ、③家族とはすでにまったくの〈自然〉ではなくて〈文化〉に属するということである。すなわち、ここに家族というものの可変性と不安定さのものとがある。④さらにもう一点。狩猟にしても採集にしても、その時その場で自分の食欲を満たして終了というわけにはいかない。あらかじめ自分一人の必要分以上に取り、しかもそれを持って帰ってあとで分配しなければならない。つまり、〈分配〉行動が成立するには、時間の観念がなくてはならず、さらに、個人の基本的生理的欲求の即時充足

を行動原理とするあり方をこえた〈他の家族メンバーに対する顧慮・配慮（ケア）〉がなければならないのである。そしてこれこそが、家族成立の根底にある根本原理なのである。

3. 家族の機能と性別役割分業・ジェンダー

家族の機能と親の役割

家族の構造や機能を探求してきたのは文化人類学や社会学である。「核家族」という概念を提出したのは人類学者マードック（G. P. Murdock, 1897-1985）であったが、彼は家族の機能として、性・経済・生殖（成員の再生産）・教育の四つを挙げた。

しかし現代の産業社会においては、経済的機能といっても生産と流通はほとんど家庭外で行なわれ、家族は消費にかかわるのみになっている。教育に関しても、学校をはじめとする教育機関や教育産業の発展によって、その大半が外部化されてしまった。つまり、家族の機能の縮小ないし委譲がすすんでいる。

社会学者のパーソンズ（T. Parsons, 1902-79）は、社会の分化と産業化が進展した20世紀中葉のアメリカ社会において核家族が孤立したありさまを見出し、そのような社会における家族の機能は、社会のための機能としてでなく、パーソナリティーのための機能として解すべきだとして、〈子どもの基礎的社会的化〉と〈成人のパーソナリティーの安定化〉の二つを示した。

この見方の前提には彼の次のような理論がある。すなわち、あらゆる社会システムは均衡・持続を保つために次の四つの機能要件を果たすことが不可欠である。① A (Adaptation)：外部状況への〈適応〉、② G (Goal attainment)：〈目標達成〉と、そのための状況統制、③ I (Integration)：内部の〈統合〉、④ L (Latency)：〈潜在〉的な、パターン維持と緊張処理である。そしてここからパーソンズ（とM・ゼルディッチ二世）は、当時のアメリカの核家族における「適応的―道具的」な役割（上のAとGに対応する）を父親に、「統合的―表出的」役割（IとLに対応）を母親に見出したのであった。すなわち、家庭外で職業的役割を果たす父親と、家庭内で感情表現によって緊張をほぐし、家族の絆を強める母親という像である。

このパーソンズらの説はその後批判を浴びることになるのであるが、その批判の要点は、「適応的一道具的」と「統合的一表出的」との二つの役割を父親と母親とに振り分けた、つまり、男女の性別役割分業を、ひいては支配—服従の関係を固定化したという点にある。

問題の焦点は、ジェンダー（gender：生物学的性差すなわちsexと区別される、社会的・文化的に構成・規定された性差の観念。わかりやすく言えば、男とはこういうもの・女とはこういうものという社会通念）と、それに伴う性別役割分業にある。しかしここでわれわれは、性別役割分業それ自体と、その特殊近代・現代的なありようを区別して捉えるべきではないか。ある時代・社会における特定のあり方、それを自明のもの・唯一絶対のものとし、押しつけるところに問題が生じるのである。われわれは、さきに家族の発端にこれを見出したように、性別役割分業それ自体は否定すべくもないと考える。吟味・検討すべきは、その今日的なあり方なのである。

養育と父親

家族はそもそも、婚姻によって異なる性が、そして生殖によって異なる世代が結びつくところに成立する。異性と異世代、二つの〈異〉がクロスしながら結びつく。この点に、家族の本質と意義が見出されなければならない。そうすれば、性別と世代の別によって家族各成員のポジションと役割に違いが生じるのは当然のことである。そしてここにはじめて、家族間の〈養育〉や〈教育〉や〈保護〉や〈介護〉が位置をもつのである。今日、性別役割分業に対する批判が盛んであるが、それがジェンダーの無化・中性化を推進するようにはたらいてはならない。ジェンダーはなくなりはいないだろうし、なくそうとする方向はおそらく間違っている。ジェンダーをなくそうとするのではなく、要は、その中身を変えていけばよいのである。

さて、〈養育〉は、さきに見たように、おそらく家族の成立当初から父親の役割に含まれていた。今日ではいっそう、子育てへの父親の参加が求められている。（山極寿一（1952-）は、すでにゴリラの“父親”にも、子どもをあやし、子どもと遊び、みなしごの面倒まで見る、養育者の姿・「父性行動」を見出している。）

パーソンズらは「適応的一道具的」と「統合的一表出的」との二つの役割

を父親と母親とに固定化したが、考えてみれば、父親が統合的―表出的なリーダーとなってもよいではないか。「笑い興ずるとか、戯れるとか、抑制されていた感情を発散させるとか、相互の愛情を表現するとか、温かさを表わすとか、支持的・受容的な態度でもって、みんながひとしくメンバーであるということ」を象徴的に表現するということ」(『核家族と子どもの社会化』(下) 178頁)を、父親が担ってもおかしくはないのである。これは固定的な性別役割分業に一定の風穴を開けることであり、ジェンダーを無化することではなくてむしろ豊かにすることなのである。

ジェンダーと性別役割分業の問題は、家庭において、生活上の具体的な課題としての〈家事〉というものをどう見るかという問題として現われる。育児は家庭の仕事、家事の一つ、女の仕事と見なされてきた。稼ぎにならない“陰の仕事”(shadow work: I. Illich)として低く評価されてきた。これに対して、家事労働をお金に換算することによってその価値を認めさせようとする動きもある。しかしそれは間違った方向だろう。貨幣価値には還元できない独自の価値としてきちんと評価すること、その真価を認めることが、男女いずれにも求められているのである。

ジェンダーと拒食症

ジェンダーに関してはもう一つ重要な問題が残っている。はじめにもふれた拒食症である。拒食症はなぜ思春期から青年期の女性に多いのか。また、なぜこの時代に増えたのか。この年代の女性はふつう、第二性徴をへて乳房もふくらみ、ふっくらとした体つきになってくる。妊娠・出産・授乳・育児が、生物的にも社会的にも、大人の女の役割とされてきた。このようなジェンダー役割の取得という形で自分が成熟していくことに対する拒否的な感情、大人の女になることとして自己のアイデンティティーを獲得することへの無意識の抵抗・拒否が、拒食症の陰に隠されているように思われる。つまり、ここにはジェンダー・アイデンティティーの拡散があるのである。いわゆる「第二の誕生」の時期、一人ひとりの人間にとって、外側から社会化されるだけでなく、自己発見・自己認識、アイデンティティーの形成が重大な課題であるとすれば、ジェンダー・アイデンティティーがその一角を占めるのは間違いない。

性別役割分業批判の依って立つ原理は、男女の〈平等〉〈対等〉〈公平〉である。しかしこれが、男女の〈差異〉を解消する方向でのみ徹底されるならば、男女それぞれの固有性・独自性は失われることになる。そしてそこに出来^{しゅったい}るのが、ジェンダーの中性化・無化という事態である。そのとき、一人ひとりの男女は、中性的で無記的な〈個人〉に還元される。——今この時代の性別役割分業批判とジェンダーの中性化の空気が、一人ひとりの女性においてジェンダー・アイデンティティーの形成の妨げになっているのではないか。(男性においては、問題が未だ熟していないにすぎない。)ジェンダー役割の外に、それとは無関係に“本当の私”や“自分に合った生き方”を探そうとする努力は、しかし、方向が違っているのであり、見当外れの徒労に終わるように思われるのである。

家族を形成するということが人類の本源的な在り方だとすれば、家族とはそのまま、ヒトの〈生〉の根源的な形式、すなわち人間が人間として生きる形なのであって、しかもそこでは性と世代を異にする個人が、異なったままに結びつくのである。この意味で、家族とは、人間の〈共同〉的存在の根本様態、根本形式なのである。

4. 生活の変化と家庭の空洞化

“裸の家族”

「家族」には輪郭と構造がある。だから家族は、比較的その形をつかまえやすい。これに対して、「家庭」はつかみどころがない。実体的に捉えにくい。しかし、あえて視点を「家族」から「家庭」に移せば、家族という語の下^{もと}では正面に出てこなかった別の面が見えてくる。

かつて家庭は、仕事の間であった。直接の生産だけでなく、水汲み^{たきぎ}・薪集め・風呂焚き^た・子守・家畜の世話など、生活上のさまざまな仕事や課題があった。生活全体に具体性と課題性があった。子どもも、その家族共同の生活課題の一部を(「お手伝い」ではなくて自分の役目として)分担していたし、真剣に生きる親の姿を身近に見ることもできていた。家族が一つの生活を営んでいるということを日々の仕事を通して実感的に感じ取れていた。共同生活の実質があり、生活の共同性を現実のこととして実際に生きていた。(p

スタロツツイ (J. H. Pestalozzi, 1746-1827) は、晩年、いみじくも「生活が陶冶する」と言ったが、そのことは、このような生活においてはじめて成立するのである。）

しかし、社会が産業化するにつれ、生産は家庭外のこととなり、生活そのものが豊かで便利でラクな消費生活に変わった。仕事とは職業を意味し、勤務先で行なうものとなり、職住分離がすすんで、子どもは親の真剣に働いている姿を目にすることはなくなった。いまや、家族が力を合わせなければならない共同の仕事はなくなり、家庭で個々人がめいめいの関心事をそれぞれの都合にあわせて別々の時間に行なっても實際上の支障はほとんどない。つまり、家庭に、家族を結びつける生活課題の具体性と共同性がなくなってしまっているのである。“家族の絆”といい“紐帯”というが、実質的な〈生〉の共同のないところに絆は生まれにくい。また、今日“父親の権威”の復活を求める声も聞かれるが、権威とは、その人の実力や品格がありありと感じられる場合に、尊敬の念とともに付与されるものであって、意図的・人為的にみずからまとうことのできるものではない。親子の〈生〉の共同、課題の共有を欠くところでは、父親の権威の発生しようはずもないのである。

加えて、かつての「イエ制度」は廃棄され、「跡取り」息子を育てて家運の隆盛を図るなどという理念は否定されて、(否定されたこと自体は評価するとしても、) 家庭を営んでいく目的が見えにくくなった。観念の上での目的と実際の具体的な生活課題という二つの“突っかい棒”がなくなって、家族や家庭は、^{おもろ} 鍾を外されたヤジロベエのようにバランスを失い、倒れかけている。あるいは、中が空洞の張りばてにすぎなかったことを露呈している。いまや、家族であること・家庭を営むこと、そのことの〈意味〉そのものが、いわば丸裸に、問われている。今日の家族は、意味論的に、“裸の家族”と化しているのである。(この状況において、さきに述べた集団の機能要件としてのⅠとⅡが突出してくる。ちなみに「友達夫婦」や「友達親子」はその現われである。しかし、“レジャーと一緒に楽しむ仲の良い家族”も、家庭生活における目的と課題の欠落を埋めることはできず、むしろその空虚のゆえになおさら強迫的に、“気晴らし”と“家族ゲーム”に励むのである。)

外注化と個人化

さて、以上のようにして、今日、生きていくこと自体が簡便で手軽な事柄になり、家庭はもっぱらいわゆる日常生活の場となった。家庭で行なうことと言えば、いまや、食事・睡眠・排泄・入浴・セックスと、休息・寛ぎ・憩い・娯楽が中心である。ところが、それらの機能は家庭でなければ果たせないというものではない。こうして、一方で、家庭の機能の外部化・外注化が、とどまるところを知らず進行していく。(子どもの養育すなわち保育の外注化も、この大きなうねりの一環をなすものと見ることもできるだろう)

他方で、家族の生活の個別化も進行し、加えて、テレビと子ども部屋(個室)が、居間や茶の間での家族の団欒を追放する。こうして家族はバラバラに分断される。いきおい他の家族メンバーに対する顧慮・配慮が失われて、関心事は個人生活上の〈利便〉に移る。人間として生きていくこと・生そのものが、〈個人〉を基点とする欲求充足の行動体系に還元されていく。家庭が、その欲求を満たす機能を果たしてくれる、便利な〈施設〉となる。家庭がhomeでなくなり、houseになる。いうなれば“家屋あって家庭なし”という状況、シャワー付き洗面台をはじめとする手軽で便利な設備の整った宿泊施設あるのみという状況が、ここに出現する。さらにここに、前述のジェンダーの問題が重なってくる。ジェンダーを見失い、互いに〈異〉性であることを忘却した〈個人〉が、そのように生活上の利便のみを追求するとき、異性の結びつきとしての家族は結びつく必然性を失って「ホテル家族」化し、家庭は内的に崩壊する。“豊かな”時代における家庭生活の外部化・外注化と個別化・個人化とが、家庭の空洞化をとめどなく推し進めているのである。

5. 家庭という〈場〉の特質

〈存在〉の〈場〉

家庭とは、家族の生活の場である。生きる場、暮らしの場である。しかしそれは、単なる空間としてのスペースではない。家族を入れる単なる容器でもない。一つひとつの家庭には固有の時間の流れが生まれ、独特の雰囲気が醸し出される。関係やかかわりの在りようまで含んで、〈場〉なのである。例えば、「あたたかい家庭」と言ったとき、すでに——家屋に付設された暖

房設備のことではなくて——、この、家庭内の人間関係の親密さや寛いだ雰囲気、ゆったりした時間の流れ、などについて語っているのである。「家庭的な雰囲気」という言い回しもあるが、事柄の連関はむしろ逆であって、この雰囲気・空気こそが家庭の本質だとさえ言ってよい。(これと響きあう文脈において、ボルノウ (O. F. Bollnow, 1903-1991) は、教育的関係の成立を支える人間学的基底としての情感的な諸前提を「教育的雰囲気」(die pädagogische Atmosphäre) と呼んだのであった。)

さきほども述べたように、現代社会において家庭は、食事・睡眠・排泄・入浴・セックスと、休息・寛ぎ・憩い・娯楽の場となっている。このことはしかし、嘆かわしい事態としてではなくて、むしろ家庭という場の特質あるいは本来性を、これまで以上にあらわに示すものと見ることができる。

家庭が憩いの場であるということは、そこでは人が、肩肘張らなくてよい、構えなくてよい、自己防衛しなくてよい場所、取り立てて目的もなく・差し迫った課題もなく、頑張る必要がなくてぼんやりと寛いでいられる場であることを意味する。また、排泄や入浴やセックスの場であることは、家庭が、端的に、裸のからだをさらす場であること、言い換えれば、こころもからだも武装を解いて裸になれる場、無防備な裸の自分、そのまま・ありのままの自分であることのできる場、さらに、ありのままの自分を表出してよい場であることを意味している。家庭とは本来、このような意味で、安全で安心できる〈居場所〉、〈存在〉の場所であってはならない。ここではその人の〈能力〉や〈業績〉は二の次であって、家庭とはまず第一に、〈存在〉の場なのである。——このことの意味は大きい。とくに、未だ有能でない子どもと、すでに有能でなくなった老人にとって。

家族関係とその〈再演〉

しかし、寛いだ状態のからだがかかわっているということは何を意味するのか。そこでは、意識のコントロールを受けない何気ない仕草や身振りや素振り、^{まなざ}眼差しや^{こわれ}声音が交わされるということである。ここでのコミュニケーションは言語化されないものを多く含み、無意識的で直接的である。表情に「顔色」が表われ、^{こわいろ}声色や目付きに「機嫌」が表われる。言葉は、むしろ本心を隠すために用いられたりもする。しかもそれらがリアルタイムで進行し、

日常的に繰り返され、積み重ねられていく。家族内のIとLというものの、その内実は、このようなコミュニケーション過程なのである。それがその家族に固有の情感的な意味空間を生み出し、また、循環的に、家族の関係の在りようがそれによって再び規定されていく。家庭環境とは、そのような“気づけられた”環境なのである。

要するに、家庭という場の特徴は、その日常性と直接性にあり、しかも、そこに「からだ」と「無意識」がかかわっているということである。言葉を換えて言えば、家庭とは、空気のように、取り立てて意識せず、気づかぬまゝいつもすでに呼吸している何かである。家庭とは、客観的に見ることの難しいもの、対象として捉えることの困難なもの、反省的に捉えられる以前にいつもすでに直接に生きられている何かなのである。

けれども、そうであるがゆえにまた、反面、家庭という場においては、子どもを真綿でくるんで窒息させるような支配、無意識からの「抑圧」、(例えば“これが私のしつけのやり方だ”というふうに)意識の中ではあらかじめ正当化された“優しい暴力”、あるいは、「ダブル・バインド」(double bind : G.Bateson)や“魂の殺人”が生じうるのであるし、同時に、それにもかかわらず、“親とはこういうもの”という刷り込みが行なわれ、子どもは親との関係のダイナミクスのなかで自分の位置どりや振舞い方を見出し、その親との関係の在りようそのものを身を以て“学習”してしまうのである。だからこそ、結果として、大人となったその子が悲惨な親子関係を〈繰り返し〉てしまうのである。幼児虐待やACが親子のあいだで〈再現〉〈再演〉されるのは、このような事情による。家庭とは、実に、両刃の剣であると言わねばならない。しかし、この悪循環を脱するみちはないのか。

6. 家庭教育の原理的基底としての〈ケア〉

〈ケア〉の場としての家庭

さきにわれわれは、家族成立の根底に〈他の家族メンバーに対する顧慮・配慮(ケア)〉という根本原理を見出した。一般に、家族が家族であるメルクマールとして、居住の共同、火の共同、生計の共同、財産の共同などが挙げられる。しかしわれわれとしては、外形的に捉えることのできるそれらの

原理より、家族や家庭を内的に支える原理として、あらためてここで、その〈ケア〉という原理を提出したい。これを忘失すれば家族は解体し、家庭は崩壊すると言ってよいのである。

ケア (care) とは何か。高齢化社会の到来とともに、この語が多用されるようになった。しかし元来この語は多義的であって、次のような多様な語義をもっている。——^{きづか}気遣う、心配する、気に懸ける、関心をもつ、配慮する、気をつける、注意する (意を注ぐ)、思い遣^やる、そして、世話する、保護する、面倒を見る、大切にする、等々。これらの根本に〈…にこころを寄せる〉という、いうなればベクトルとしての心のはたらきがあるのであって、ある場面におけるその具体的な表われとしての行為が、例えば「世話」となるのである。逆に言えば、「世話」の根本に、相手に〈こころを寄せる〉ということがなくてはならない。人に対する〈ケア〉においては、相手の〈存在〉にこころを寄せるということ、すなわち〈存在に対する配慮〉が核心をなすのである。(念のために言い添えておくが、これは、ケアする側の〈禁欲〉や〈自己犠牲〉とは無関係である。)

家庭とは、もともと、人がそこで生まれ・育ち・老い・死ぬ場であった。人生の場と言ってもよい。ところで、人の一生のありさまをつぶさに見ればすぐにわかるように、人間は“役立たず”で生まれ、“役立たず”となって死ぬのである。それゆえ、生涯の起点と終点においては、〈有能さ〉〈達成〉〈業績〉という価値や原理は問題にならない。能力主義や競争原理を持ち込むことはできない。その人の〈能力〉の有無、有能性や有用性、これまでに〈達成〉したこととしての〈業績〉(achievement; 「学業成績」もこれである)、これらは一切関係がないのである。逆にそこでは〈存在に対する配慮〉すなわち〈ケア〉という原理があらわに問題となる。〈ケア〉があってはじめて、養育や保育、介護が成立するのである。

かつてホスピタリズムは、「乳児であっても、未だ意思表示できなくても、人間なのだ。人間は栄養と衛生だけで育つものではないのだ」ということをわれわれに教えてくれた。現代の「ホテル家族」は、その内部に〈ケア〉という原理を欠いている。みんなが若くて健康なうちはよい。しかし、早晚、家庭の外に、老人となった家族の〈介護〉のための施設 (hospital) を必要とすることになる。すなわち、ケアの外注化である。それはやがて、ホスピ

タリズムの老人版、“老人のホスピタリズム”を生み出さざるをえないだろう。われわれは、ここにかつてのホスピタリズムと同質の問題が潜んでいること、そしてそれは取りも直さず、家族と家庭にとって本質的な〈ケア〉の問題であることに気づかねばならない。(ただし、ここでは原理の問題を問題としているのであって、現実の問題として“高齢者介護は家族の仕事だ、社会的介護は必要ない”と主張しているわけではない。)

親に求められるもの

子どもに対する親の責務とは何か。それは、〈ケア〉を忘れて、早くからあれやこれやの個別的な知識・技能の伝授、すなわち instruction としての教育に走ること(早期教育)ではない。何よりもまず、無条件に子どもの〈存在〉を肯定し受容して真率な関心を寄せること、家庭を子どもと自分との〈存在の場〉〈居場所〉とすることが求められる。これが家庭教育の前提条件である。人間教育としての education は、そこから始まるのである。

子どもは、存在をみつめられ、安心して住まうことのできる場としての家庭が確保されれば、それを「基地」として「外」の世界へと目を向け、探索と冒険の旅を開始する。さまざまな体験を積み重ね、新しい「世界」と「自己」を発見しながら成長していく。そうして、親を乗り越えていくこともやがて可能となる。——つまり、さきの親子関係の〈連鎖〉〈再演〉を断ち切るカギはここにあるのである。(若者の「引きこもり」とは、そのような成長過程を辿ってはこなかったことを示す一つの現象にほかならないのであって、外部世界のみならず、家族との接触さえ拒否している姿である。人間をまもる“最後の砦”が、家庭から自分の個室へと縮小してしまっている。もはや家庭すら、居場所ではなくなっている。家庭自体が、原理的に〈存在〉をゆるす場でなくなっているのである。この家庭に、外部社会の原理、すなわち産業社会において優位を占める〈達成〉〈業績〉原理の侵入・席捲を見出して、あながち的外れとは言えないだろう)

子どもというものが“授かる”ものから“つくる”ものになってすでに久しい。けれども、いつの時代も、子どもは、みずから望んでこの世に生まれてくるのではないし、親を選んで生まれてくるわけでもない。にもかかわらず、その親に全面的に頼るほか、生きていくことはできない。それゆえに、

親には、この事実に見合うだけの深い認識と覚悟が求められる。それがなければ、家庭も子育ても、一切が親〈個人〉の恣意によることと成り果てるのである。家庭とは、実に、人間が〈共に在ること〉、〈共同存在〉の原基であり、〈存在に対する真率な関心・配慮〉すなわち〈ケア〉の原体験の場である。家庭——それは、教育をめぐる諸問題・個別テーマの単なる一つではない。人間の〈生〉と〈存在〉の根源に位置するものなのである。

【参考文献】

- (1) 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、1994年。
- (2) J. H. van den Berg, *Dubieuze liefde in de omgang met het kind*, Nijkerk : Callenbach, 1958. 英語版 *Dubious Maternal Affection*, Pittsburgh : Duquensne Univ. Press, 1972. ヴァン・デン・ベルク著、足立叡・田中一彦訳『疑わしき母性愛 子どもの性格形成と母子関係』川島書店、1977年。
- (3) 小此木啓吾『家庭のない家族の時代』ABC出版、1983年。ちくま文庫、1992年。
- (4) 斎藤^{もと}学『アダルト・チルドレンと家族 心のなかの子どもを癒す』学陽書房、1996年。
- (5) A. Miller, *Am Anfang war Erziehung*, Suhrkamp, Frankfurt / Main, 1980. A・ミラー著、山下公子訳『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』新曜社、1983年。
- (6) 河合雅雄『人間の由来』(上)(下) 小学館、1992年。
- (7) 同『サルからヒトへの進化』(NHK人間大学テキスト) 日本放送出版協会、1995年。
- (8) G. P. Murdock, *Social Structure*, New York : The Macmillan Company, 1949. G・P・マードック著、内藤莞爾監訳『社会構造』新泉社、1978年。
- (9) T. Parsons & R. F. Bales ed., *Family : Socialization and Interaction Process*, Routledge & Kegan Paul, 1956. T・パーソンズ、R・F・ベールズ著、橋爪貞雄他訳『核家族と子どもの社会化』(上)(下) 黎明書房、1970年。『家族——核家族と子どもの社会化』(合本)、1981年。
- (10) 石川 実編『現代家族の社会学』有斐閣、1997年。
- (11) 山極寿一『ゴリラとヒトの間』講談社現代新書、1993年。
- (12) 浅野千恵『女はなぜやせようとするのか 摂食障害とジェンダー』勁草書房、1996年。
- (13) O. F. Bollnow, *Die Pädagogische Atmosphäre — Untersuchungen über die gefühlsmässigen zwischenmenschlichen Voraussetzungen der Erziehung*, Quelle & Meyer, Heidelberg, 1965. O・F・ボルノウ著、森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの——教育関係の人間学的考察——』黎明書房、1969年。
- (14) M・J・ランゲフェルド著、和田修二監訳『よるべなき両親 教育と人間の尊厳を求めて』玉川大学出版部、1980年。

